白峰山脈縦断記

小島烏水

青空文庫

緒言

前年雨のために失敗した白峰山登りを、再びするために、今年（四十一年）は七月下旬高頭式、田村政七両氏と共に鰍沢へ入った、宿屋は粉屋であった、夕飯の終るころ、向い合った室から、一人の青年が入って来た、私たちが、先刻から頻に白峰、白峰と話すのを聞いて、もしやそれかと思って、宿帳で、姓名を見てそれと知った、というので同行を申し込まれたのである、大阪高等工業学校の生徒、倉橋藤次郎氏である、一人でも同行者を増した心強さは、言うまでもない。

翌朝例の通り、人夫を傭って、西山峠を越えた、妙法寺の裏から、去年とは違った道――北海とも、柳川通りともいうそうだ――を登った、そうしてデッチョウの茶屋の前で、去年の登り道と一ツに合った。

このたびは霧がなかった、紫の花咲くクカイ草、蘭に似た黄色の花を垂れるミヤマオダマキが、肉皮脱落して白く立っている樅の木を、遠く見て、路傍にしなやかに俯向いている、熊笹が路には多い。

四方の切れた谷を隔てて、近くに古生層の源氏山を見る、去年は、どうしてこの山が、気が注かなかったろうと思う。

峠が上り下りして、森らしくなる、杜鵑がしきりに啼く、湯治の客が、運んだ飜ぼれ種子からであろうが、栂の大木の下に、菜の花が、いじけながらも、黄色に二株ばかり咲いていた、時は七月末、二千米突の峠、針葉樹林の蔭で！

苔一面の幹を見せて、森の樹の蔭には、蘭が生え、シシウド、白山女郎花、衣笠草などが見える、しかし存外、平凡な峠だ、樹も思ったより小さいし、谷は至って浅い、去年の霧の中に炙り出されたものは、梢一本さえ、どこに深く秘されたのだろう、夢から醒めたようだ、これじゃあ、森林などというほどではなかった、霧の嘘つき！　と嘲った。

温泉はやはり、新湯に泊まった、去年（四十年）秋、笹子峠のトンネルを崩壊し、石和の町を白沙の巷に化して、多くの人死を生じさせた洪水は、この山奥に入ると、いかばかりひどく荒れたかということが解る。温泉附近の路が酷くくずれている、宿の前で嗽いをした筧の水などは、埋没してしまっている。

例の晃平を主として、四人の猟師を雇って出発した。

早川から黒河内、榛の河原、それから白剥山と、前年の路を辿ったときに、洪水か

らの荒廃は一層甚だしかった、まるで変っている、川筋はもとより、山腹の道などは、捩(ね)じり切って、棄てたように谷に落ちている、大村晃平、同富基、中村宗義などいう、土地で名うての猟師を連れたのだが、どのくらい路を損したり、無益に上下したかは解らぬ。

白剥山の入口などは、解らなくて、森の中を一行が、離れ離れに迷うばかり、滝上(たきのぼ)りまでもやった、一時は絶望に近かった、しかし山腹に辿りついてからは、去年の路が、微(かす)かに見分けが出来た、頂は存外変りがなかった。

そうして一行は東俣谷の、オリットの小舎(こや)に着いた、私が恐い、怖ろしい念(おも)いをしながらも、もう一遍後髪を引かれて見たいとおもった小舎の前の深潭(しんたん)は、浅瀬に変って、水の色も、いやに白っちゃけてしまった。

ここを出立点として、改めて稿を次ぐ。

川楊（大井川の上流）

前夜は、東俣の谷へ下りて、去年と同じくオリットの小舎に野宿をした。

今朝は、四時半に眼がさめる。禽(とり)の、朗かに囀(さえ)ずる声は、峰から峰へと火がつくようで

ある。寝泊りした小舎の頭の、白花の咲く、ノリウツギの間からも起る。サルオガセの垂れる針葉樹の間からも、同じように起る。この声の行くところ、水と、石と、樹と、調子を合せて、谷間の客を揺り起す。間の岳（赤石山脈）の支峰だと晃平のいう蝙蝠岳は、西の空に聳えて、朝起きの頭へ、ずしりと重石を圧えつける。

小舎の前の渓水に嗽ぐ。水は、南へと流れる。当面の小山を隔てて、向は、西俣の谷になる。私たちの、これから溯ろうという、東俣の谷と、西俣の谷とは、下流三里のところで一つになり、初めて田代川――馬子唄で名の高い、海道一の大井川の上流――となって、西南の方向へと、強い傾斜を走って行くのである。

晃平は、前の川へ釣綸を垂れて、岩魚一尾を得た。これをぼつぼつ切にして、麩と一緒に、味噌汁にして、朝飯を済す。それから、昼弁当の結飯をこしらえ、火に翳して、うす焦げにして置いて、小舎の傍から拷って来た、一柄五葉の矢車草の濶葉に一つずつ包む。何という寛濶な衣であろう、それをまた……おそらく、谷初まって以来であろう、燃えるような、紫の風呂敷に包ませて、出かける。

谷といっても、旱つづきの時は、水が涸れて、洲が露れるし、冬になれば、半分ほども水が落ちるというのに、今までの雨つづきで、水は、嵩にかかって、蜥蜴色に光りながら、

迅(はや)り切って流れている。膚(きめ)の細(こまか)い、黄(きいろ)い石や、黒い石の上を辷(すべ)ると、思いなしか、沈んだ、冴えた声をして、ついと通る。この谷を一回、大きい徒渉をやる、つづいて二回の小徒渉をやる。深いところは、稀に膝以上まで水が来るが、頭の平ったい、太鼓の胴のような大岩や、頭だけ、微(かすか)に水面に露している石が、入り乱れて立ったり、座ったりしているから、大概は、石伝いで飛ばされる。そうして、水はこれらの石の間を潜り、上を辷って蜿(う)ねる。細い皺(しわ)が網を打ったようにひろがる。さざ波は綱の目のように、水面に織られる。その大網の尖端は、紐(ひも)のように太く揺れて、アール・ヌーボー式の図案に見るような、印象の強い輪廓を作って、幾筋となく繋がっては、環(わ)を作る。やがて柔らかな大曲りをして消える。痕(あと)を残さない、濃さと淡さの碧が、谷から舞い上る霧のほむらに、ぬらりと光る。さわると、鱗(うろこ)でも生えていそうな水だ。いかにも足が冷たい。膝がざぶりと入った……その中に、尻まで深くなる。ここを「捩(ね)じれ窪(くぼ)」というそうだ。霧は、頻に、頭の上を飛ぶ。空気も、その重さに堪えないで、雨を、パラパラ落して来る。

次第に、谷が蹙(せま)って来る、水は、大石の下に渦を巻く。深いところは紫を浅いところは藍を流している。白い沫(あわ)が、その上を回転して、両崖の森林を振りかえりながら、何か、禍(わざわい)の身に迫るのを、一刻も早く遁(に)げたいというように、後から後から、押し合って、飛ん

で行く。潭石の下には、大さ針の如くなる魚が、全身、透き通るように、青く染って、ぴったりと、水底に沈んでいる。水の面には、生の動揺といった象が見えている中に、これはまた青嵐も吹かば吹け、碧瑠璃のさざれ石の間に介まって、黙んまりとした死の静粛！　それでいて、眠っているのではない、どこか冴え切って、鋭く物に迫るところがある。鰭一つ動かすときは、おそらく、水紋が一つ描かれ、水楊の葉が一枚散り、谷の中には大入道のような雲がぬうっと立ち昇って、私たちを包んで、白くしてしまうときであろう。私は、この深谷の幾千本針の針葉樹よりも、はた幾万斛の水よりも、一寸の魚が、谷の感情を支配していないとは言えなかった。

潭が深くて、渉れないから、崖に攀じ上る。矢車草、車百合、ドウダンなどが、栂や白樺の、疎らな木立の下に、もやもやと茂っている。川床に突出する森の下蔭は、湿りっ気が、最も多いかして、蘇苔が、奇麗に布かれている。気紛れに、そこへ根を卸したような五葉松は、仰向けに川の方へ身を反らして、水と頷ずき合って、何か合図をしている。崖下の黯い水も、何か喚きながら、高股になって、石を跨ぎ、抜き足して駈けている。崖の端には、車百合の赤い花が、ひときわ明るく目立つ。この花を、山家の少女の衣模様に染めたらば、などと思いながら、森を出て、河原に下り、太い逞しい樹の蔭に立った。

仰向いて見ると、その樹は、川楊である。章魚(たこ)の足のような根を、川砂の上に露していながらも、倒れずにいる。シバヤナギ、タチヤナギ、いろいろな名があろう、幹の皮は、皺だらけで、永年洗い落したことのない垢……青苔が、厚くこびり粘(つ)いている。夜になると、この筋の根に、一本一本神経が入って大手を振って、のさり、のさり、谷の中を歩きそうだ。川に沿(つ)いて、両側に森がある。森には、樅(もみ)や樺の類が茂っている。しかし、川の中まで足を踏み入れて、人間を嗅ぎ出して、突き倒し兼ねないのは、この川楊ばかりだ。何となく、いやな樹だ。

谷のことだから、水を横に切っては、右側へ移ったり、左側へ寄ったりする、私の前には、猟師が、鍋や米袋をしょって行く。腰に括(くく)ってある紫の風呂敷が、揺れると、強烈な色彩の波動(バイブレーション)が、流水の震動と一つになって、寂しい谷が、ぱっとなる。

と、眼の前に、ふわりと、雪の粉が落ちる……七月末の炎天である……直ぐ、水に吸い込まれて消える……また、頬を掠(かす)めて、ふわりと飛ぶ。信濃の浅間山、飛騨の硫黄岳、遠くの火山から、吹きなぐれた灰でもあろうか……空は曇り切って、どんよりと、眠むそうな顔をしている。何だろう、今のはと、眼と眼を見合せる。鶺鴒(せきれい)が、もの忘れから気が注(つ)いたといった風に、石の上から、ついと飛ぶ。

ふと、頭の上を見ると、谷に冠さるようにのさばって、古い、大きな、先刻のと同類の楊の梢が一本ぶらりと垂れている。その梢に、一面のほうけた絮(わた)が、風もないのに、氷でも解けるように、はらり、はらりと、落ち散るのであった。

その後、春になって、街道に青く角芽(つのめ)ぐむ柳の糸を見るたびに、大井川上流の深谷に秘められて、黙々と、皺だらけな、深刻な顔を、水に覗かせている老楊が……ああ、今もなお、鮮やかに眼に。

前夜の小舎から半里ばかりの間は、水もかなり深くて色も鮮やかである。水成岩の峡間を流れるだけあって、どこか、赤石山下の、小渋川に似ている。小渋川よりも、川幅が狭くて、谷地が、かえって濶(ひろ)いだけに、徒渉の回数は少い、深山の渓流としては、先ず安楽な方で、小渋川や、槍ヶ岳の蒲田(がまた)谷などとは、深さと、急と、嶮(けわ)しさとにおいて、到底、比べられない。

なお半里も来て、下氷瀬(しもひせ)というところになると、枯木と、石の欠片の沙漠地で、水は、細く、片寄せられて、流れている。川は、やがて、左に折れて、農鳥山支脈の峡間に入って、益す(ますま)狭く、石が次第に多い。うしろを振りかえると、そそり立つ山——森林で埋まる

山にふさがれて、川は、全く、両山迫れる間の、凹流になってしまう。蝙蝠岳から来る瀬が一筋、ここで合う。これを上氷瀬（かみひせ）という、バロメートル（ートル）を見ると、実に海抜二千三百米（メ）突、あまり高過ぎるから多分狂っているのであろう。

深潭が、また一つある。川は、底を傾けて、水を震うので、森の中まで、吹雨（しぶき）が迷い込んで、満山の樹梢を湿（うるお）す。白樺や五葉松は、制裁もなければ、保護もなく、永（とこし）えに静粛に、そして厳格に、造化の大法を、寸分容赦なく行ってゆくように、この自然の王国から、定まれる寿命を召されて、根こそぎに、谷の中にたわいなく倒れている。床几（しょうぎ）代りにまた腰をかけて、少し休む。河原の砂に、点々として、爪痕のあるのは、水を飲みに下りた、鹿の足痕であると、猟師はいう。同行の高頭君は、退屈紛れに、杖を沙上に揮（ふる）って、それを模写していた。自然は欺かれず、人間の智能は、鹿の足痕一つをだに描き得なかった。

昨夜は、この旅行で、初めての野宿で、睡眠不足であったためか、私は眠くなった。風は峡間にどこからともなく漲（みなぎ）って来て、樹々の葉は、婆娑婆娑（ばさばさ）と衣摺（きぬず）れのような音を立てる。峡谷の水分を含んだ冷たい吐息が、頬（ほお）や腮（あご）にかかる。川の水が子守歌のように、高くなり、低くなって、私たちの足音を消して、後から追い冠せて来るときには、一行はまた、森の中の人となっていた。森の中には款冬（ふき）の濶葉が傘のように高い。ドウダンツツジの葉

と、背向きになって、翠(あお)い地紙に、赭(あか)っちゃけた斑(ふ)が交ったようだ、何枚も、何枚も、描き捨てられた反古(ほご)のような落葉が、下に腐って、半ば黒土に化けている。

また河原へ出た。もう時刻だから、紫の風呂敷を開ける。矢車草の葉包が釈(と)かれて、昼のものが腹に入った。空は、もう泣き出しそうになって、日の眼を見ないから、手が凍(こご)える。焚火(たきび)に暖まっていると、きょうは、七月の二十三日だのに、という声が、一行の中から洩れた。

それから、幾度も川の水を避けて、森に入ったり、河床へ下りたりする。森の枯木は、白く尖って、路を塞いでいるので、猟師は、先登に立って、鉈(なた)で切っ払う。太い、逞ましい喬木でも、心(しん)が朽ちているから、うっかり捉(つかま)ると枝が折れて、コイワカガミや、ミヤマカタバミの草の褥(しとね)へ俯(のめ)ったりする。また、幹には苔が蒸して、皮は土より柔く、ぼろぼろに腐っているから、生あるものの肌のようで、ぬらりと滑り、ぐちゃりと触れて、いやな気持がする。

谷は、益(ますま)す迫って来る。手を伸し合う針葉樹は、格子縞(こうしじま)を、虚空に組み合せている。その間を潜って、霧の波が、さっと寄せると、百年の古樹は、胴から上を、蝕ばまれるように、姿を持って行かれる。樹の下は、皆石である。石の上に、根を托さぬ樹は少い。そ

の石も、樹も、皆、水の威力に牽引されているようで、潤々（ひろびろ）とした河原に、一筋水が走っている。この水のみが、活物の緑を潜（ひそ）めているかと思われる。およそ、山の中の氷の下から、数珠を手繰（たぐ）るように落ちて来る、峡間の水ほど力の強い、自由の手も少いであろう。そうして、未だ、深秘の故郷にいるかのように、足踏して跳（おど）り狂っている。根曲り竹も、楊の根も、樅の肌も、はた長くしな垂（だ）れるサルオガセも、その柔嫩（じゅうなん）の手に、一旦は、撫でられぬものはない。華麗と歓楽とを夢みるように、この雪白く、氷堅き北方の閉鎖から解かれて、南方の奢侈（しゃし）を、立ち姿や、寝像にまで現して、昼となく、夜となく、おそらく、千年も万年も、不断の進みをつづけているのだ。ああ、本洲の比類のない水成岩山、その高きこと、一万尺、古生層地の峡間を流れる水！　この氷の解放に伴って、いくばくの犠牲を、要求されているかは、河原の荒涼粛殺を見たまえ。性（しょう）なきまでに白げられたる、木の骨――というより外に、与える名がない――と、砂に埋まれた楕円石や、稜角の鋭いヒイラギ石やは、丁度、人間の屍骸が、木乃伊（ミイラ）となって、木偶（でく）か陶製の人物か、区別が見えないと同じように、原性を失って、唯一自然の平等相に復帰している。そのいたましい最後の均一！

私たちは、互に、言語もなく、眼と眼とを見合せて、すさまじい荒廃の姿に顫（ふる）えた。

森谷沢という一筋の小川が、左から流れて、落ちるところあたりから、谷というよりも、沢の方へ近くなり、両側の山の頭が低くなって、天が俄に高くなった。これらの山を踏まえて、農鳥山の支峰、白河内岳が、頭を出す。名にし負う白峰、赤石、両大山脈が、東西に翼をひろげて、長大の壁をたてめぐらし、互に咫尺する間に、溝のように凹まった峡谷は、重々しい鉛色の空であるから、まだ一時半というのに、黄昏のように、うす暗い。前夜の小舎よりは、二里の余も来たろう。

とうとう大雨が降って来た。私たちは、森の下蔭に身を潜めて、小止みを待っている。雨嫌いな私は、鰍沢で、万一の用心にと、買って置いた饅頭笠を冠り、紐の結び方で苦心をしているうちに、意地の悪い雨は、ひとまず切り上げてしまって、下界を覗く空の瞳がいまいましいまでに冷たい。また、二回の徒渉をして、広河内へと達した。

私は、このような狭苦しい谷の中で、このような広濶な地を見られようとは思わなかった。広河内のあるところは、東俣の谷の奥の、殆んど行き止りで、白峰山脈と、赤石山脈の間が、蹙って並行する間の、小い盆地である。丁度、白峰山脈からいえば、農鳥山の支峰の下で、河原から、赤石山脈の間の岳とは、真面に向き合っている。両山脈の相対す

る間隔は、直径約一里もあろうか、間の岳の頂までは、この河原から一里半で達せられる。岳の裾から河原へは、灰色の沙(すな)が、幾町の長さの大崩れに押し出している。全く洪水よりも怖しい沙の汎濫である。絶頂から山越しに向へ一里半も下りると、中股というへ出られる。なお一里で、小西股の材木小舎に出て、そこから八里ばかりで、この旅行の発足点とした、湯島温泉へ下られるということであったから、もし天候が嶮悪で、白峰山脈縦断が、覚束(おぼつか)なかったら、その路を取って、引き返すはずにして、きょうは天候も悪いし、これから農鳥山に登る間に、適当の露宿地がないというので、まだ早いが一泊することにした。猟師は楓の細木を伐(き)り朴(たお)し、枝葉を払わないままで、柱を立て、私たちの用意して来た、二畳敷ほどな油紙二枚を、人字形に懸けて、家根を作る。それから、樅や、栂の小枝を、鉈(なた)で、さくりさくり伐り落して、鮮やかな、光沢のある、脂の香気が、鋭敏に鼻感を刺戟する、青葉の床を延べる。ふっくりと柔く、尻の落ちつきがいい。同行八人の寝室も、食堂も、ここで兼ねるのである。早速、焚火にかかって、徒渉に濡れた脚絆(きゃはん)を乾すやら、大鍋を吊(つる)して湯を沸かしたりする。

広河内の土地のありさまは、中央日本アルプスの聖境、上高地の中、島々(しましま)方面から徳(と)本峠(くごう)を下り切った地点に、よく似ている。大沢が、濶く、峡間に延びて、峡流の分岐し

たのが、幾筋となく蜿ねり、枯木が、踏み砕かれた、肋骨のようになって、何本も仆れている。水に漂流したまま、置いて行かれたのであろう。そうして、山榛の木、沢胡桃などが、悄然と、荒れ沢の中に散在している。栂、樅、唐檜、白樺などは、山の崖に多く、水辺には、川楊や、土俗、水ドロの木などが、疎に、翠の髪を梳っている。七月の炎天も、この谷間までは迫って来ないと見えて、白剥山を一つ超えて、東俣の谷へ来ると、未だ若葉、青葉の新緑が、生々しかったが、ここまで溯ると、濶葉、細葉は、透明を含んだ、黄の克った、明るみのある嫩い緑で、霧の雫にプラチナのように光った裏葉を翻えしている。峰には未だ、残の雪がかっきりと、白く浮き上って見えるほどである。一体に、谷は、四月の末か、五月頃の柔々しい呼吸で充ちていて、大きな声を出すのすら、いたいたしいようだ。しかし、駒鳥の錘を投げるような鋭い声は、沈滞がちな、中層の空気を引っ掻き廻している。

飯の準備をしているうちに、驟雨が一としきりあって、雷鳴が近くに聞えたが、夜に入って、星が瞬いた……かと思うと、淡い、軽い霧が、銀河のように空に懸る。焚火の烟は、油紙の屋根の継ぎ目から洩れて、白い柱が立っては崩れ、風に折れて地を這いながら、谷中を転げてゆく。火が、ぴしぴし、音を立てて、盛に燃え出すと、樺の立木の葉が、鮮

やかに、油紙の屋根に印して、劃然とした印画が炙(あぶ)り出される。晃平が、先刻、未だ日の暮れないうち、朝飯の菜にとて、山款冬(やまふき)数十茎を折って来たのを、みんなして、退屈凌(しの)ぎに、繊維(すじ)を抜いては、鍋へ投げ入れる。世間話がはずむ……夜半になると、焚火は、とろとろと消えかかる。寒気の強いのと、明日の天候が気になるので、眼がよく覚める。

露営地の外では、細長い爬行(はこう)動物――この谷の主――東俣の川――が、蜿(う)ねりながら太古の森林の、腐れ香に噎(むせ)んで、どこまで這って行くことであろう。

白花石楠花と高根薔薇（白峰山脈の一角に立つ記）

ゆうべは、まんじりともしなかった、油紙の天井を洩れる空に、星が閃(ひら)めいていれば、明日の好霽(こうせい)を卜(ぼく)されるので、仰(おが)むようにして悦ぶ、その次に覗(のぞ)くと、星どころではない、漆黒の空である、人の心も泣き出しそうになる、しかし暁天までには、焚火のとろとろ火に伴(つ)れて、穴へでも落ちたようにグッスリと寝込んでしまった、眼が覚めると鳥の声がする、谷間に「ひんから」「ひんから」と響きわたる、それが年久しく谷川の底に沈んでいる、透き通った、白い冷たい、磁器の魂が啼くのでもあるようだ。

起きて見ると、霧が団くなり、筋になり、樹の間から立つ、森からも、谷底からも、ふわりと昇る、例の山款冬の茎を、醤油と鰹節とで煮しめて、菜にする、苦味のない款冬である、それから昨夕の残飯に、味噌をブチ込んで「おじや」を拵えて啜る、昼飯の結飯は、焚火にあてて山牛蒡の濶葉で包む、晃平の言うところによると、西山の村では、この牛蒡の葉を、餅や団子に捏ね入れて、草餅を作るそうだ、蓬のように色が好くはないが、味は宜いと。

一夜作りの屋根――樅の青枝を解き施して、焚火に燻ゆらしてしまう、どんなに山が荒れても、この谷底まで退かない決心である、脂の臭いのする烟は、シュウシュウと呻りながら霧に交わって颺ってゆく。

川に沿いて、一、二丁も溯り、正東の沢へと入る、石の谷というよりも、不規則に、石を積み累ねた階段である、石からは水が声を立てて落ちている、石の窪みには澄んだ水が湛えている、その上に、楢の葉が一枚、引きって捨てた紙片のように、浮いている、自然という無尽蔵は、何物をも、こうして惜しげなく、捨てるのだ、これからの深林もそれだ。

石の谷の中途から、路を奪って針葉樹林に入る、唐檜や栂やの純林である、樹は大きく

はないが、ひょろひょろ痩せて丈が高い、そうして油気の失せた老人のように、はしゃいだ膚をして、立っている、十五、六年前に、一度伐採したことがあるのだそうで、その痕跡の仆木(ふぼく)が、縦横に算を乱している、そうして腐った木に、羊歯(しだ)だの、蘇苔が生ぬるく粘(こ)びついて、唐草模様の厚い毛氈(もうせん)を、円く被(かぶ)せてある、踏む足はふっくらとして、踵が柔かく吸い込まれる、上へ上へと高くなるのであるが、段々暗い地の底へ吸い込まれるようだ。

向って蝙蝠(こうもり)岳の残雪が、銀光りに輝いて、その傍に三角測量標が、空を突いて立っている、間(あい)の岳(たけ)（赤石山脈）は森に隠れて見えない、冷い風が、暗い穴からでも来るように、ひいやりと吹く、鳥はひんから、ひんからと、朗らかに囀ずる、登るに随って、蝙蝠岳はほぼ正西(まにし)に、間の岳は北西に、いずれも残雪白く、光輝を帯ぶ。

稀に痩せた白樺が交って来た、傾斜は二十五度位であろう、幸いなことには、岩が少なくて、黒く滑らかな土ばかりだから、足の躓(つまず)くおそれがない、白檜(しらべ)も現われて来た、痩せ細って、痛々しい、どこを見ても、しッとりした、濡れたような、温味がない、日は天に冲(ちゅう)して、頭の直上に来ているが、深林のために強烈な光線が、梢に遮られ、反抗されて、土まで落ちて来ない、峡谷の底は見えないが、サルオガセを長く垂らした針葉樹が、梢と

梢とを抱き合い、すくすく躍(おど)って、私たちに向って来る、その茂りの下から、水の声が、ザーッと、雨でも流すように、峰を伝わって追いかけて来る、間の岳と蝙蝠岳とは、いつしか峰つづきになって、蝙蝠岳の残雪は、下で仰いだような、一条や二条ではない、数斑の白が、結晶したように劃然と碧空を抜き、鮮やかに、眉に迫って来る。

今朝の小舎からは、もう一里余も来たであろう、深林の中に踏み均(な)らした小径がある、晃平は「こりゃ鹿の路だあ」と言って、目もくれずに先へ立って登る、禿木(はげき)の枯れ切った残骸が、蒼玄(あおぐろ)い針葉樹林の間に、ほの白く見える、死んでも往生が出来ないという立ち姿だ、霧がフーッと襲って来て、樹々の間を二めぐり三巡(めぐ)りして、白檜の梢に、分れ岐(わか)れになり、ひそひそと囁(ささや)き合いながら、こっちを振り返って、消えてしまう、間の岳と蝙蝠岳の峰々の繋がりは、偃松(はいまつ)であろう、黯緑(あんりょく)の植物で、繍(ぬ)ってあって、所々に白雪の団々が見える、この赤石山脈の大嶺は、始終私たちを瞰下(みおろ)して、方幾里の空中を、支配する怖ろしい王さまででもあるように、蜿蜒と深谷を屏風立に截(た)ち切っている、そうして肩から雲を吐く、雲は梢に支えられて、離れ離れではあるが、私たちの頭へと、徐(おもむ)ろに集まって来るらしい、鳥はひんから、ひんからと啼く。

傾斜が次第に急になる、白檜も段々小さくなる、谷々の風が吹き荒(すさ)んで、土をくずし、

樹を吹き折り、上から押し流すので、傾斜がなお急になるのであろう、また一筋の路が深林の中を横ぎっている、何でも奈良田(ならだ)の人が、材木を盗伐するために、拓いたので、この道は広河内(ひろこうち)から一里半の上、池の沢というところから初まって、奈良田から四里もあるという、白河内(しろこうち)の谷まで切ってあると、晃平は語った、唐檜の伐り痕の、比較的新しいのは、それかも知れない、彼らは盗伐して、板に挽(ひ)いて、曲げ物のように組んで、里へ出すのである、林務官などが殺されたりするのも、こういう路で、不意に盗伐者に邂逅(かいこう)するときである、野獣のような盗伐者は、思慮分別もなく、牙(きば)を咬(か)んで躍りかかり、惨殺して後を晦(くら)ましてしまうのである。

白檜の丈も、四、五尺になった、山の頂は直ぐ額の上にあるかして、水分を含んだ冷たい空が、俄にひろくなる、樹影に白い花が、チラリと見えた、誰が叫ぶとなく、石楠花(しゃくなげ)石楠花という声が伝わった、そりゃもう登山家(マウンティニアー)でなくては、想像の出来ない、世間も、人間も忘却した、心底からこみ上げて来る嬉しい声が、この一株を繞(め)ぐって起った、白峰の雪は白い、その雪解の水を吸って育った、石楠花の白花は、天風に芳香を散じて、深林の中に孤座している、西の国のアルプスの人たちが、石楠花を高山薔薇(アルペン・ローズ)と呼ぶのも無理はない、私は何よりも懐かしい石楠花に、そっと接吻した、足許を見ると、黄スミ

レも咲いている、偃松が始めて見えた、久しぶりの知音が、踵(きびす)を接して、ドヤドヤと霧の扉を開けて、顔を出して、手招きをしている。

偃松は、もう白檜帯と、一線を劃(かぎ)った、その境目から下は灰色で、上は黯緑だ、黯緑の偃松は、山の峰へ峰へと、岩石を乗り越え、岩壁の筋目へと喰い入り、剃刀のような脊梁(せきりょう)を這って、天の一方へと、峰のそそり立つところまで、這い上っている、偃松の中には、風で種子を飛ばされたと見える白檜が、一、二本、継子扱いをされたように、悄然とサルオガセを垂れながら、白く骨立っている、弱きものにも寄生する更に弱きものがある、顧れば白檜帯は、脚下に圧しつけられ、背丈を揃えた庭の短木のように、いじけて、それでも森厳として、太古ながらの座席を衛(まも)っている、そして片唾(かたず)を飲んだように、静まり返っている。

虚空の領分へ、人間が入ったときには、霧の使者が、先ず出迎えに来る、――先刻咽(ささや)き合った、それだ、小雨のそば降るように来た、一行の中には偃松を見て、引き返すような男はいない、しかし素(も)と素(も)と、路でないところへ割り込んで来たのである、白檜の林はともあれ、偃松の犇々(ひしひし)と隙間のない海原へ入っては、往くことも戻ることも出来ない、晃平は、鉈(なた)で偃松を切ッ払い、切り落し、辛うじて路を作った、私は先登になった、偃松の

大波に揺り上げられながら、岩のあるところを目懸けて、縋(すが)りつく、倉橋君も、それから少し後れて、高頭君と中村君とが、みんなこの蒼玄(あおぐろ)い波に、沈没したり、浮き上ったりして、つづいて泳いで来た、敢えて泳ぐという、足が土に着かないからだ。

岩の上には、浦島ツツジ、ツガサクラ、コケモモなどが、平ッたくしがみついている、私は岩角に身を倚(よ)せて、眼下遥かに低い谷底を見た、雲と霧と入り乱れて、フツ、フツと山上目がけて来る、その裂け目から谷を隔てて赤石山脈の大嶺、その間に、また谷を隔てて早川の連嶺が、幾析となく重なって、不安な光輝を放っている。

幾重の雲の中から、名の知れない山の顔が……肩から肩へと、腮(あご)を載せて、私を冷やかに見ている。

もう遁(に)がすことではないぞよ。

耳許で嘲笑(あざわら)いされたり、私語(ささや)かれるような気がする。

私は先んじて上った、幸いに偃松が薄くなった、それを破って、岩石が醜悴(しゅうかい)の面を擡(もた)げている、その岩石のつづく先は、霧で解らない、私は岩伝いに殆んど直線にグングン這い上った、霧はもう深林の中でのように、キュッというような、柔(や)さしい咽き方ではない、ヒューと呻(うな)って、耳朶を掠(かす)めて行くのだ、無論荒ッぽい風に伴って来るのである、私

はその風を避けて面を伏せようとして、岩の罅(か)け目に、高根薔薇(アルペン・ローズ)が、紅を潮(さ)して咲いているのを発見した、匂いがいかにも高い、私はこのときほど、高山植物の神秘に打たれたことはない、白花の石楠花は、潔いけれど、血の気の失せた老嬢のように、どこか冷たかった、今一と目、この花を見ると、もう堪まらなくなって、凍えても私は、この高根薔薇を胸に抱いて死にたいと思った、高山植物というものを、殆んど摘み取ったことのない私も、このときばかりは、――白峰赤石(しらねあかいし)、峰々に住ませたまう荒神たちも許させたまえ――一輪を衣裏(ポッケット)へと秘めた、そのときは霧中の彷徨(ほうこう)で、考える余裕もなかったことだが、文芸復興(ルネッサンス)期以後、伊太利(イタリー)唯一の天才と呼ばれた山岳画家ジョヴァンニ・セガンチーニが、夏の初めアルプス山の雪中で、莟(つぼ)める薔薇を発見して「薔薇(エ・ローズ・リーフ)の葉」という名画を描いた、それは白い床の雪の中から髪の毛の柔かい、薔薇色の頬の愛らしい乙女が、顔を出して、涼しい眼をパッチリと瞬いている、背景(バック)は未だ寂寥な眠から醒(さ)めない、暗(やみ)の空に、復活の十字架が、遠くに小さく見える、象徴の匂いの饒(ゆた)かな作品である、あの高根薔薇は、私には永久に忘られない花の一ツである。

やっとこの山での最高点――と思う、霧で遠くの先は解らない――へ着いた、何だかこう俄に広い街道へでも出たような気がした、霧はフィューと虚空を截(き)って、岩石に突き当

って、水沫を烈しく飛ばす、この水球(みずたま)はどこの谷から登って、どこの谷へ落ちるのか解らない、雷鳥だか山鳩だか、赤児のような啼声が、遠くなり、近くなって、偃松の原から起る、冥府の奥の、奥の方から、呼ぶようで、気が遠くなる、未だ後の人たちが来ないので、私は岩角に尻を据えて、黙って霧の中に座っていた、霧は鋭敏なる神経を有する触角のように、尖端を三角形にして、ヒューと襲って来る、霧ではない、もう雨だ、岩も偃松も、寂寞そのものの、しわがれ声を挙げる、私は孤独だ、天もなく、地もなく、ただ幾団が幾団に、絶えず接触して、吹き荒るる風と霧があるのみだ、宇宙におよそ蕭殺の声といったら、高原の秋の風でもなければ、工場の烟突の悲鳴でもない、高山の霧の声である。

その中に倉橋君が来る、晃平を殿(しんがり)として、一行が揃う、こう霧がひどくては、方角も何も解らない、晃平は荷を卸して、路を捜索に出たが、無益に戻って来た、岩の間を点接して、トウヤクリンドウ、ミヤマキンバイ、ミヤマウスユキソウ、チングルマなどがあったが、風と霧と雨の中で、一々眼に止めていられない。

それでも石の河原のような小隆起を、二タ山ほど盲越えに越えた、高頭君はウラジロキンバイが多いと、指して驚いている、この高山植物は、白馬岳や八ヶ岳に産したものだが、今濫採されて、稀少になったものだそうで、今のところ、ここが最も豊饒(ほうじょう)な産地であ

ろうと語られた。

未だ時間はあるが、もうこの天候では泊まるより外はないことになった、路側の窪んだところに、猟師でも焚火したと見え、偃松の榾(ほだ)が、半分焦げて捨ててあった、その近傍の窪地を選んで、偃松と偃松との間に、油紙を掛け渡し、夜営地を張り、即刻焚火をした、手でも、足でも、寒気に凍えて、殆んど血が通ってるとは思われない、晃平たち案内者は、さすがに甲斐甲斐しい、蓆(むしろ)に雪をどっさり包んで、担い梯子でしょって来て、それから薬(や)罐(かん)の中で、湯を作る、茶を煮る、汁粉を作る、雪の臭いを消してうまかった、晃平は雨の小止みを待って、雷鳥を銃殺して、羽毛を捞(むし)って、肉を料理する。

油紙の天幕の中に、私たちの金剛杖を、三本組み合せ、それへ縄を下げて、鍋を吊り、偃松の枝や根を薪材にして、煮炊(にたき)をするのだ、山頂の風雨とはいいながら、焚火さえあれば、先ず生命に別条がないということを知っているから、連中懸命になって、薪材を山のように搬(はこ)んで、火のそばへ盛り上げたものだ、それでも凍えてはならないと、有りったけの衣類を出して衣(き)た、困ったことには雷鳴がいかにも強い、頭上五、六尺のところを、転がって行くようで、神経がピリピリするから、鉈でも、眼鏡でも、鉄物(かなもの)は、凡(す)べて包むことにした、雨は小止みになったり、また大降りになったりする、大降りのときは、油紙

の天幕の中央が、天水桶のように深くなって、U字形に雨水の重味で垂れ下る、今にも底を突き抜きそうであるから、連中底の下から手で押し上げると、雨水は四隅から迸(ほとばし)って、寝ているところへ流れ込む、空鍋を宛てがって承(う)けたり、茶碗で汲みこぼしたり、騒ぎが大きい。

面白そうに笑って作業をしながらも、天外の漂流者という孤独の感が胸に迫る。

鼠色の印象（暴風雨前の富士山及び白峰山脈）

汽車の中は、蒸されるように混んだ、肘(ひじ)と肘と触れ、背と背と合された人々が、駅ごとに二、三人ずつ減る、はてはバラバラになって、最後の停車場(ステーション)から、大きな、粗い圏(わ)を地平線に描いて散った、そうして思い思いの方向へと往(い)った。

鳶(とび)のように、虚空へ分け入ったのは、私たちである、あれから五夜で、私たちは海抜八千尺ほどの、甲州アルプスへ来た、山の上には多年雪に氷に磨り減らされて、鑢(やすり)のように尖った岩が、岩とつづいて稜角(リッジ)がプラットホームのように長い、甲府平原から仰いだ、硬い角度の、空線(スカイライン)の、どれかの端を辿(たど)っているのだ、何万という、下で寄り集まった眼

球がみんな私たちを仰向いているような気がする、その稜角の窪んだ穴の中に、頭を駢(なら)べて、横になったのが、私たち四人――人夫を合せて八人――偃松(はいまつ)の榾火(ほだび)に寒さを凌いで寝た。

霧が夜徹(よどお)し深かった、焚火の光を怪しんで、夜中に兎が窺(うかが)い寄ったと、猟師は言ったが、私は寝ていて知らなかった、草鞋(わらじ)も解かないで、両足をとろとろ火に突っ込んで、寝ていたとき、小坊主がちょこちょこと歩んで来て、人の寝息を窺ったのを、微(ほの)かに知っている、眼を覚ますと、スーッと白い霧の中へと飛んで、羽ばたきの影が、焚火に映ったようだ。

寒いので仲間が、入れ代りに眼をさます。猟師は、焼木杭(やけぼっくい)に烟管(キセル)をコツコツ叩きながら、

今がた雷鳥が何羽も出来やした。

と話す。

霧はフツ、フツと渦巻く、偃松に白く絡んで、火事場の烟でも立つように、虚空を迷っている、天幕(テント)の屋根の筋目から仰ぐと、暗灰色の虚空(そら)が壁のように狭くなって、鼻の先に突っ立っている、雨と知りながらも、手を天幕の外へ出すと、壁から浸染(にじ)み出る小雨に、五本の指が冷やりとする、眼がやっと醒(さ)める。

ゆうべは月がちょっと冴えたのに……雨かなあ。
と仲間の一人が欠伸(あくび)をして言う。
そのときは、富士山が、怖ろしく大きく見えたが、見ているうちに、細くなって莟(つぼ)んでしまった。
……いやな、霧だなあ。
と、私は嘆息する、天地の間には、風が吹くのでなければ、霧が流れるのだ、そのたびに、天幕の中へ、ザアと小粒の雨がそそぎ入る、柱代りの金剛杖が、キュッと呻る、杭に纜(もや)われた小舟が、洪水に翻弄されるように、油紙の屋根が、ペラペラ動く。
何時だか、時計を出すのも臆劫(おっくう)だ、朝だか夜中だか解らない。
尻に敷いた褥(しとね)は、可愛らしい高山植物で、チングルマの小さい白花、アカノツカサクラの赤い花などが、絨氈の斑紋になって、浮き上る、焚火の影に、鮮やかな織目を見せる。
早く日の目が見たい。
早く穴の中から這い出したい。
同じ思いが、仲間の顔色に読まれる、飯を炊くのに、未だ時間がある、思い切って天幕から一、二間歩き出した、岩を二ツ三ツ飛び越えて、次第に爪先が上る、無辺無限の単(モノ)ト

調(ニイ)の線が、どこへ繋(つな)がって、どこへ懸っているのか、解らない……やはりあの空線の一つを辿っている。

天幕が霧の中に、小さくぼんやり見える、四ツ柱に、油紙がぺらぺらとして、田舎の卵(ら)塔場(んとうば)のようだ、今まで、あそこに寝ていたのか知ら……この霧と雨の中を、たった紙一枚の下に……火光がパッとさす、霧の水球(みずたま)が、美しい紫陽花(あじさい)色に輝いたかとおもうと、消えた。

稜角の端まで這い出して、小さい阜(おか)――古代の動物の骨のようにゴロゴロ転がっている石の堆積――の上に立った、石はビッショリと濡れて、草鞋が辷る。

朝明りか知らん大きな水平のひろごりが、足許に延されている、白い柔毛(にこげ)のような雲が、波の連続するように――したが一つの波も動くとは見えない――凸凹(たかひく)を作って、変化のある海が、水平線の無限に入っている、しかし正面は、霧が斜に脈を引いて、切れそうにもない、その間から彎弓(ひきゆみ)のような線が、幾筋となく泳いで出た、ハッキリすると土堤ほどの大きさになった、山である、関東山脈の一端と、早川連嶺の一角とだけが、おぼろに見えたのである、山と山との間は、みんな空席で、濃厚な水蒸気が、その間に屯ろしている、山という山の各自は、厳しく守られている、生物は守られていない。

雲は凍っているのか、吐息を凝らしているのか、巨大の容積がしずまり返っている。

その深さが何万尺あるか測られない、この中に何か潜力的（ポーテンシアル）な、巨大な物が潜んでいる、そうして生物を圧迫する――化性（けしょう）の蝙蝠（かわほり）でも舞い出そうだ。

あの底には、もしくは外には、都会がある、群集がある、燈火（ともしび）、音曲、寄席、芝居がある、群集と喧噪の圧迫から遁（に）げて、天涯の一角に立ったときに、孤独と静粛の圧迫！

少し明る味がさした、明る味のさした方角を東に定めている、その東の空が、横さまに白く透いた、奥の奥の空である、渋昏（しぶくら）く濁った雲の海の面（プレーン）が、動揺混乱するけはいが見える。

外套をふわりと脱いだように、眼の前の霧の大かたまりが、音もなく裂けて、谷へ落ちた。

富士山が、すッきりと立った。

名も歴史もない甲州アルプスに、対面して、零落（れいらく）の壮大、そのものが、この万年の墳墓を中心にして今虚空を奔（はし）る。

空々寂々の境で、山という山の気分が、富士山に向いて、集中して来る、谷から幾筋とない雲が、藍の腐ったような塊になって、立ち昇る、富士山はこの雲と重なって、心もち

西へ西へと延びて来るようだ、蝕(むしく)った雲の淵の深さが、何十尺かの穴となって、口が明く。

頭がようやく冴えて来た、足許の岩では、偃松が近くは緑に、遠くは黯(くら)くなって、蜿(うね)っている、天外絶域の、荒れはてた瘠土(やせつち)にまで、漂って来た、緑の垂直的終点を、私は今踏んでいるのだ。

空の気味の悪いほど、奥まで隙(す)いて光っているだけに、富士山は繻子(しゅす)でも衣(き)たように、厚ぼったくふやけている、いつもの、洗われたように浄い姿ではない、重々しい、鼠ッぽい色といったらない。

いつの間にか、仲間が一人来る、二人蹤(つ)いて来る、岩の上には、黒いピリオドが、一点、二点、三点――視線は一様に、鼠色のそれに向う。

富士かね。

富士だよ。

あの山は眠ったことがないから、醒めたこともないというような、澄した顔つきをしている、私たちとの距離は、いよいよ遠くなった、その間を煙のように、眼先を霧が立って、右へ往きそうになったり、左へ思い出して、転がったりしている。

厚味の雲の奥で、日が茜(あかね)さしたのか、東の空が一面に古代紫のように燻(くす)んだ色になった

……富士の鼠色は爛(ただ)れた……淡赭色の光輝を帯びたが、ほんの瞬く間でもとの沈欝に返って、ひッそりと静まった。

フツ、フツと、柔くて、しかも鋭敏な音を立てて霧――雨が来た、偃松も、岩も、山も、片ッ端から白い紙になって、虚空に舞い上る。

富士も一息に吹き消された、土地という最大多数から、少量をつまんで、年代また年代と、築き上げて作製した、百万年の壁画が、落ちた。

寂しさは、人の心の空虚を占領した。

鼠色の凶兆(しらせ)はあった、それから間もなく、疾風豪雨になって、一行は、九死一生の惨(みじ)めな目に遇(あ)わされた。

石・苔・偃松（白河内岳に登る記）

野営を撤して、濡れそうなものは油紙で包み、岩伝いに北を向いて、大籠山(おおかごやま)と後で名をつけた一峰に達した、三等三角測量標が立っている、霧が吹雨(しぶき)を浴びせかけて、顔向けも出来なかったが、白峰山脈で、初めての三角標に触れたのだから、ちょっと去りにくい

気がした。

それから北西に向って、一つ支峰を越えると、鉢形に窪んだところがあって、白山一華の白と、信濃金梅の黄とが、多く咲いている、チングルマの小さい白花、赤紫の女宝千鳥などで、小さい御花畑を作っている、霧の切れ目に、白河内岳が眼の前に、ぼんやり現われた、足許は偃松の大蜿ねりで、雲は方々の谷から、しきりに立ち登る、太古の雲が、初めて山の肌に触れたのは、この辺からではあるまいか、そうして執念深く、今もなおあの山に、つき纏って、谷の住み家を去らずにいるのではあるまいか……前々夜泊まった広河内の谷が、乾からびたように見える、その附近の黒い森林は、一寸位ずつ這い上って来るようで、雲の揺籃のように、水球をすさまじい勢いで吐き出す。

西に向いて、また一峰を超え、やや下ってまた北に向って上る、霧の中で目標にする山もないから、手に磁石を放さない、何でも北へ向けばいいのだ、北へ、北へと歩む。

ふと東北に地蔵鳳凰二山が見えた、鳳凰山の赭っちゃけた膚に、蒼黯な偃松が、平ッたくなって、くッついている、うしろには駒ヶ岳が、蒼醒めた顔をして覗いている、前には白峰本岳から連続するらしい二枚の連壁が、低いながらも遮っている、今通過した大籠山は、駱駝形をして、三角測量標が、霧の波に冠されながらも、その底から頂へと突き抜い

て、難破船の檣のように出ている、見る見るうちに霧に喰み取られて、半分位持って行かれてしまったかと思ったが、また繋ぎ合わされて立っている、西に間の岳（赤石山脈）が立ち、東に富士山が、二筋ばかりの白い雪を放射して、それが泥黒い雲を通過する光線に翳されて、何だか赤く銹びた鉄のように見える、富士山の附近は、御阪山脈や、天守山脈だけを、小島のように残して、氷に鉋をかけたような雲が、ボロボロ転がっている、山という山の背景は、灰色で一面に塗り潰されている。

北方白峰の本嶺は、一切霧で秘められている、その一切を秘められた北へ北へと、私たちは見えない手に、グイグイ引っ張られて、否でも応でも行かなければならないのだ。

北西の一峰を踰えたことを記憶している、そこに何があったかと言えば、白花の石楠花があったことだけが答えられる。

乱石で埋まった一峰を越したことも、憶い出される、雪が氷っていたことだけが、眼に泛ぶ。

それほど霧で眼界を窄められていた、それだけまた神経が鋭く尖っていた、自分たちから一間ばかり、先へ離れて、雷鳥がちょこちょこ歩いて行く、こっちで停まれば向うでも停まる、歩けば先へ立って行く、冥府から出迎いにでも来た悪鳥のように、この鳥の姿が

消えるとき、自分たちの運命も終焉を告げるように。

雄大なる白河内岳が、円く眼の前にボーッと立つ、この山を中心として、雲の大暈が、幻のように圏を描いてひろがる、日輪の輪廓がひろがって黄色い葵の花のように、廻転するかと思われた。

風が錐のように痛い、白河内岳の麓で、焚火をしていると、おくれがちの人夫も、あとから追いついて来た、その中の一人は、雷鳥を捉えて来た、少しは休んだが、風と霧と冷たいのと痛いので、落ちつく空はない、とかくに気の重い人夫どもを促して、登りかける、実を言うと、どの方面へ向いて、何処を登っているのだか、もう解らない、人夫もみんな初めての途で、茫然しているばかりだ、ともかく眼の前の大山を登った、石片が縦横に抛げ出されている、しかし石と石とは、漆喰にでも粘ッつけられたようで動かない、いずれも苔がベッたり覆せてある、太古ながらの石の一片は、苔に包まれた古都の断礎でも見るように、続々と繋がって、爪先を仰ぐばかりに中天に高く斜線を引いている――もう白河内岳の上にかかっているのだ、この饅頭形の石山は、北アルプスの大天井岳にどこか似ていると思いながら、喘ぎ喘ぎ登る、霧は大風に連れ、肉を截り削ぐばかりの冷たさで、ヒューッと音をさせて、耳朶を掠めた、田村氏の帽子は、掠奪くられたように、向う

の谷へ抛げ出された、製造場の烟突からでも出そうな、どす黒い綿のような雲が頭から二、三尺の上を呻(うな)って飛び交う。花が光を、川は音楽を失った、ソラッ暴雨(しけ)だッ、というときには、眼も口も開けられないほどの大雨が、脳天からかけて、人間を石角に縫いつけた、そうして細引のような太いので、人間を毬(まり)のようにかがる、片足を擡(もた)げれば、擡げた弱点から、足を浚(さら)って虚空へ舞い上げそうな風が、西から吹きつける、誰だって血の気の失せない人はなかった、どこへ遁(に)げようとか、どこが安全だとかいうような余裕が、この際誰にもなかったので、我がちに岳の下の偃松の穴へ――野営としてきわめて不適当ではあったが――一人ずつ飛びこんで、偃松の根許へ這い込んだ、この刹那(せつな)は、私の頭の中も、暴風雨の荒(すさ)むように不安であった、油紙の天幕を枝と枝との間に低く張って、四ツ足の人間を、この中に這わせた、寒さに手も凍(こご)えて、金剛杖さえ持つ力がなかった。

焚火焚火、人々は手足の関節から、血の循環(めぐり)が一秒一秒止まったように、意識された、今凍えて行くのだということも解る、早くどうかしろと神経が知らせてくれる、誰の顔を見ても、蝋のように白い、マッチ箱は燐寸(マッチ)一本さえ、烟を立てることなしに、空(から)になったほど、何もかも、ビショ濡れになった。

だが晃平一人はウンと踏ん張った、

心配するなッ、犢鼻褌を焚いたッても、お前方を殺すことじゃあねえぞ。

と、その赤銅色の逞ましい顔を、一行に向けて爛とした目から、電が走ったときは、一行に大丈夫という観念を与えた、彼は鉈で杖を裂いた、杖の心まで雨は透っていないから、細い粗朶が忽ち出来る、燻してどうかこうか火が点いた、そうすると白烟が低い天幕の中を、圧されて出る途がないので、地を這いずった、高頭君は息を窒められて、ヒョロヒョロと仆れた、避けようとした私はジリッと焦げ臭く髯を焼かれた、堪まらなくなって天幕の外へ首を出すと、偃松の上は、吹雨の柱が、烟のように白く立っている、また油紙の下へ引ッ込んでしまう、倉橋君は昨夜睡られなかったので、よくよく眠かったと見え、この騒ぎの中にもグッスリ寝込んでいる、白花の石楠花が、この生体のない人の頬に匂っている。

耳を澄まして、谷間に吹き荒ぶ風の声を聞くと、その怖ろしさといったらない、初めは雷とばかり思っていた、あまり雷にしては間断なく鳴るから、不審に思って聞くと、「大井川の七日荒れ」だという、その「荒れ」が、今の風雨で初まったのだという、谷の角から谷の角へと屈折し、反響して、空気の大顫動が初まったのである、この山はいつ頃出来たのであろう、そうして何百万年もこうして寂として、いたのであろう、それが十年に

一度、五年に一度、人間が入って来ると、谷間の底に潜んでいる風が、鎖を繋がれながらも、それからそれへと哮(たけ)り狂って、のた打ち廻り、重い足枷(あしかせ)を引き擦り引き擦り、大叫喚をしているのであろう、油紙の天幕の下は、朽木の体内のように脆くて、このまま人間は、生きながら屍(しかばね)となるのではあるまいかと、思われた。

この暴風雨がいつまでつづくか解らぬ、それよりも、差し当りこんなところに、今夜野宿が出来るか、否かが疑問である、思い切って谷へ下りようか、谷へ下りれば、この旅行の中止を意味することになる、一行は思い悩んで決し兼ねた……何だか筋骨を抜かれたように、気落がして、私も眼が重くなった。

高頭君であったか、誰であったか、不意に消魂(けたた)ましく、日本晴れだぞ、痛快痛快と、触れ廻るように叫んだ声におどろかされて、刎(は)ね起きると、雨はいつの間にやら霽(は)れ上り、西の方の空が一点の痣(あざ)をも残さず、拭いて取ったように、透明に奥深く冴えわたっている、鼻ッ先には農鳥(のうとり)山と間(あい)の岳(たけ)（白峰山脈）が、近く立っている、こんな大きな山々が、今まではどこに秘んでいたのだろう、天から降ったのかと思うように、出たのである、間の岳は頭がちょっと出ている。農鳥山の赭(あか)ッちゃけた壁には、白雪がペンキでも塗ったように、ベッたりと光って輝いている。

西の方には木曾御嶽が、緩斜の裾を引いて、腰以下を雲の波で洗わせている、乗鞍岳は、純藍色に冴えかえり、その白銀の筋は、たった今落ちたばかりの、新雪ででもあるかのように、釉薬（つやぐすり）をかけた色をして、鮮やかに光っている。

槍ヶ岳以北は、見えなかったが、木曾駒ヶ岳は、雪の荒縞を着ながらも、その膚の碧は、透き通るように柔らかだ、恵那（えな）山もその脈の南に当って、雄大に聳（そび）えている。

もう「こっちのものだ」という、征服者の思いが、人々の胸に湧く、今までのように、悄気（しょげ）た顔はどこにもない、油紙は人夫どもに処置させて、先刻遁（に）げ込んだばかりの、白河内岳の頂上に立って、四方を見廻した、南の方、直ぐ傍近く間の岳（赤石山脈）と、悪（わるさ）沢岳が峻（けわ）しく聳えて、赤石山がその背後から、顔を出している――ここから見ると、悪沢岳の方が、近いだけに、赤石山より高くはないかと思われた、甲府平原は、釜無笛吹二川の合流するところまでよく見える、直ぐ脚下には、岩壁多くの針葉樹を帯びて、山の「ツル」（脈）が、古生層岩山の特色を見せて、低く幾筋も放射している、脈と脈との間には、谷川が幾筋となく流れている、手近いのが広河内、一と山越えてその先のが荒川、最も遠いのが能呂（のろ）川に当るのである、鮎差（あゆさし）峠の頭もちょっと見えた。

峰から峰の偃松は、暴風雨のあとの海原のように凪（な）いで、けろりと静まりかえっている、

谷底の風の呻吟(しんぎん)は、山の上が静粛になるだけ、それだけ、一層凄(すさ)まじく高く響いて来る。

汽船・電燈（農鳥山に登る記）

白河内岳から西北へと向いて、小さな峰の塊を、二つばかり越えた、西の方面、木曾山脈が、手に取るように近く見える、三ツ目の峰の下の、窪んだところに、残雪が半ば氷っていた、岩高蘭(がんこうらん)や岩梅がその界隈(かいわい)に多い、踏む足がふっくりと、今の雨でジワジワ柔い草の床に吸い取られる、この辺から眼の前の農鳥山を仰ぐと、残雪が白い襷(たすき)をかけて綾を取っている、荒川の峡谷を脚の下に瞰(み)ながら偃松(はいまつ)の石原を行く、人夫たちは遥に後(おく)れて、私たち四人が先鋒になって登る。

農鳥山は大約(おおよそ)三峰に岐(わか)れているようだ、手近を私たちは――後の話だが――仮に南(みなみ)農鳥(のうとり)と名づけた、雪が二塊ばかり、胸に光っている、近づくほど、雪の幅が成長して大きくなる、雪の側はいわゆる御花畑で、四ツ葉塩釜(よばしおがま)、白山一華(はくさんいちげ)、小岩鏡(こいわかがみ)などが多い。

この大残雪を踏んで、南農鳥の傾斜を登ること半ば頃から、大なる富士山は、裾野から

沙(すな)を盛り上げたように高く、雪が粉を吹いたように細い筋を入れている、その下に山中湖、それから河口湖が半分喰い取られたようになって、山蔭の本栖(もとす)湖の一部と、離れ離れに静かな水を伏せている、函根、御阪、早川連嶺などが、今の雨ですっきりと洗われて、鮮やかな緑(りょくてん)色をしている、愛鷹(あしたか)を超えて伊豆半島の天城山が、根のない霞のように、ホンノリと浮いて、それよりも嬉しかったのは、駿河湾に黒煙をかすかに一筋二筋残して走っている汽船！

黄花石楠花(きばなしゃくなげ)が、岩角の間に小さくしがみついて咲いている、その間を踏んで、登れば、千枚沢岳と悪沢岳の間に、赤石山が吊鐘(つりがね)を伏せたように円く立っている、支脈伝いに背面を見た時には、壮大だと思った白河内岳も、ここから見ると、可愛そうなほど、低くなって、下に踞(うず)くまってしまった。

南農鳥の上に出た、足の下から大障壁をめぐらして、近く農鳥山の三角測量標を見たときは嬉しかった、しかし登り著(つ)くと南農鳥の最高点は、まだここではなく、五、六町も先にあることが解った、これから截(き)っ立った、ギザギザ尖った石が、堤防のように自然に築き上げられているところを伝わるのだ、偃松と、黄花石楠花の間を抜き足をして、やっと南農鳥山の二等三角測量標の下に来た、おそらく参謀本部陸地測量部員が、野営をした跡

ではあるまいかと思われる、ちょっとした平地へ出た。

ここから見ると、石の剣(つるぎ)の大嶺が、半円形にえぐられて、蜿蜒(えんえん)として我が日本南アルプスの大王、北岳(きただけ)に肉迫している、その北岳は、大岩塊が三個ばかりくッついて、その中の二塊は、楕円形をしているが、一塊は恐ろしく尖(とが)っている、そうして四辺(あたり)に山もないように、この全体が折烏帽子(おりえぼし)形に切ッ立って、壁下からは低い支脈が、東の谷の方へと走っている、能呂(のろ)川があの下から出るのだと、追及して来た猟師が、そう言ったが、実際私たちは、川などはどうでもよかった。

もう山という山が、みんな顔を出して来た、地蔵岳鳳凰山を隔てて、八ヶ岳の火山彙(かざんい)が見える、上野(こうずけ)下野(しもつけ)の連山は、雲を溶かして、そのまま刷毛(はけ)で塗ったのではないかとおもうような、紺青色をして、その中にも赤城山と、榛名山が、地蔵岳と駒ヶ岳の間に、小さく潜んでいた、その最右端に日光連山、左の方に越後の連山がぼんやりとしていて、先(さ)刻(つき)吹き寄せられた雲の名残か知らん、氷のようなのが、幾片となく、その辺の頭をふわりと漂っている、午(ひる)を過ぎたが、濃い透明の空は、硝子(ガラス)で張り詰めたようだ、黄色の日光が、黄花石楠花を蒸して、甘酸ッぱいような、鼻神経(びしんけい)をそそるような匂いとも色ともつかないのが、眼から鼻へと抜ける、頭がボーッとする、これでも踏む土の一部分だろうかと思

うようだ、残雪は幾筋となく、壁間を放射して、緑の森林の中へ髪の毛を分けるように、筋目をつけて落ちている、ただ北アルプスの大山脈は、雲に閉じられてしまって、いつまで経(た)っても出て来そうにもない。

金剛杖が石にカチリと当る、金属性の微かな短い音がしてコロコロと絶壁の下に転げ落ちる、どこを見ても絶壁！　墜石！

三角測量標の直下には、誰かが前に土を均(な)らした痕のある、野宮地には誂(あつら)え向きな、三間位な平地が出来ている、黄花石楠花、小岩鏡、チングルマ、岩梅などが、疎らに生えている、位置は東を向いて、富士山と対している、南へ向いた断崖には、数条の残雪があるから、溶かして水を獲ることが出来る、時間は猶(まだ)早いが、これからまた峻しい山稜つづきで、適当な野営地が見つからぬかも知れないから、今夜はここで寝ることにした。

例の天幕(テント)作りに取りかかる、古生層地は白峰までつづき、鳳凰地蔵一脈の間で、深谷にフツリと切れているのが、よく見える、人夫たちは雷鳥三羽を捕獲した、みんなして二羽を醤油飯に、一羽を焼いて喰った。

霧がまた少し来た、夜になると、甲府市の電燈が黄いろの珠のように、混沌の底から、ボーッと見えた、先刻の汽船といい、この電燈といい、人間に遇わずに、山から山を伝わ

って、野獣のような生活をつづけていた人々の胸をおどらせた。

夜も深くなった、焚火がとろとろと消えかかったとき、風が吹いて天幕の油紙が巻くられた、その隙間から潜り込んだ風で、焔がパッと燃え上って光ったときは、寐込んだ油断に身体に火がついたかと思って、一同夢うつつに駭いて立ち上った、霧がいつの間にか深くなっていた、油紙は雨に遇ったように湿めっている、冷やりと手に触れたので眼が醒める。

山の肌（間の岳の雪田に到る）

朝起きて見ると、霧がまだ深い、西の方がまだしも霽れていて、うすくはあるが、明る味がさす、東天の山には、霧が立て罩めて、一行はこの方面に盲目になった、日は霧の中をいつの間にか昇っている、冷たい白い月のように、ぼんやりとして、錫色の円い輪が、空の中ほどを彷徨っている、輪の周囲は、ただ混沌として一点の光輝も放たない、霧の底には、平原がある、平原の面は皺が割れたようになって、銀白の川が、閃めいている、甲府平原は、深い水の中の藻のようにかすんで、蒼く揺めいているばかりだ。

この連日、峰から峰を伝わっているので、水がないから、顔も洗われない、焚火で髭(ひげ)を焼いたり、その焚火の煤煙や、偃松の脂(やに)で、手も頬も黒くなったり、誰を見ても、化かされたような顔をしている、谷へ下りたい、早く谷へ下りて、自由に奔放する水音が聞えたら、まあどんなに愉快だろう——谷川の流れる末に、巣くう人里などは、考えるさえ、まだ遠いのである。

二等三角点に添って、西へと向き、見上げるような、岩の障壁を攀(よ)じると、急に屏風が失くなったようになって、北の方から、待ち構えていた冷たい風が吹きつけて来る、強い風ではないけれど、遠くは北の方、飛騨山脈や、近くは西の方木曾山脈の山々の、雪や氷の砥石(といし)に、風の歯は砥(と)がれて、鋭くなり、冷たさがいや増して、霧を追いまくり、かつ追いかけて、我らの頬に噛みつくのである、我らは吹き込む風の中心になったようで、その冷たさと、痛さとに慄(ふる)えながらも、山稜(リッジ)を伝わって行く。岩は鋼鉄のように硬くなりながらも、イワベンケイ、ミヤマダイコンソウ、ムカゴトラノオなど、黄紫のやさしい花を、点々とその窪洞(うろ)に填(う)めながら、ギザギザに尖っている輪廓を、無数に空に投げ掛けている。

西へ西へと、伝わって、一山超えると、また一山が、鋭い鑿(のみ)で穿(く)りぬいたように、大曲りに蜿(う)ねった山稜(リッジ)を、連鎖にして、その果に突立っている、仰ぐと、西の天は雲が三万尺

も高く、堆(うずたか)くなって、その隙間には湖水のように澄徹した碧空が、一筋横に入っている、中農鳥とおぼしき一峰を超えると、また一峰がある、日が昇るに従って、雲や霧は、岩と空の結び目から、次第に離れて消えて行く、葉を一杯に荷った楡(にれ)の樹のような積雲は、方々が頽(くず)れて、谷底へと揺落してしまう、そうしてその分身が、水陸両棲の爬行(はこう)動物のように、岩を蜿ねり、谷に下って、見えなくなる。

空は高くなって、四方は壮大な円形劇場(アムフィセアタア)のように開展する……出た……出た……木曾御嶽は、腰から上、全容を現わした、木曾駒ヶ岳も近くに立ち上った、方々から頭を白く削った稜錐状(ピラミダル)の山々が、波のように寄せて来た。

脚下の谷へ追い落された水蒸気の団々は、反曲の度を高めて、背を山に冷やさせ、顔を日光に向けて、ふわりと立って飛ぶ、それが長く繋(つな)がって、日を截(た)ち切ったかと思うとき、異常な光がチラリと岩角に落ちた、ふと見上げると、円い虹のようなものが、虚空の中に二輪も、三輪も結ばれた、その輪の中に、首を貫ぬいて五、六丈もあろうかと思うような、黒い巨人が、ヌーッと立っている、富士登りの道者のいう、三尊の阿弥陀の来迎はこれだ、侏儒(いっすんぼうし)のような人間が、天空に映像されたときに、このような巨人となったのだ、我らが手を挙げると、向うでも挙げる、金剛杖を横縦(よこたて)に振り廻わすと、空の中でも十字架

を切る。暁を思わせるうす紅色で、雨気を含んだ虚空に、浸み透るように、暈(ぼか)して描かれた自分たちの印画は、この大なる空間を跨(また)いで、谷間へと消え落ちた。

この山の上で、朝から夕立に遇っては堪まらないと、多年山登りの経験から気がついて、呆れ顔の導者を促して路を急ぐ、岩角を上ったり、下ったり、偃松や黄花石楠花の間を転がるようにして走ったが、その間に幻影は消え消えながら、三度出た、しかし心配ほどもなく、霧は奇麗(きれい)に拭われて、雨にはならなかった。

間(あい)の岳(たけ)は大断崖を隔てて北に聳えている、北岳はここからは見えない、峻急な山頂の岩壁を峰伝いに北に向けて直下する。間の岳はもう眼の前に立っている、山の空気が稀薄で透明になっているから、それが近いように見えていて、歩くに遠いのが解る。

雪で釉薬(つやぐすり)をかけたように光る遠くの山々は、桔梗(ききょう)色に冴(さ)え渡った空の下で、互いにその何百万年来の、荒(すさ)んだ顔を見合せた、今朝になって始めて見た顔だ、或るものは牛乳の皮のように、凝(こお)った雪を被(かず)いている、或るものは細長い雪の紐(ひも)で、腹の中を結えている、そうして尖鋭の岩を歯のように黒く露わして、ニッとうす気味悪く笑っている。

目的(めあて)は間の岳にある、残んの雪は、足許の岩壁に白い斑(ぶち)を入れている、偃松はその間に寸青を点じている、東天の富士山を始めて分明に見ながら、岩や松を踏み越えて、下りる

と、誰が寝泊したのか、野営地の跡が、二カ所あった、石を畳み上げて、竈が拵えてあるので、それと知れたのだ、偃松の薪が、半分焦げて、二、三本転がっている。

尾根を伝わって、東に富士山、西に木曾の御嶽を見ながら行くと、また野営地があった、そこはちょっとした草原になっていた、雪解の水で湿っているところへ、信濃金梅の、黄色な花の大輪が、春の野に見る蒲公英のように咲いている、アルプスの高山植物を、代表しているところから、アルプスの旅客が、必ず土産に持ちかえるものにしてあるエーデルワイス（深山薄雪草）は銀白の柔毛を簇がらせて、同族の高根薄雪草や、または赤紫色の濃い芹葉塩釜、四葉塩釜などと交って、乾燥した礫だらけの窪地に美しい色彩を流している。

振り返れば、間の岳（赤石山脈）や、悪沢岳の間から、赤石山が見える、そうして千枚沢の一支脈は、兀々した石の翼をひろげて、自分たちの一行を、遥かに包もうとしている。

東へ方向を取って、また北へと折れる、右にも左にも、雪田がある、ここから近く見た間の岳は、破れた石を以て、肉としている、おそらくその石を悉く除けば、間の岳は零になるであろう、その石だ、老人の皺のように山の膚に筋を漲らせているのも、古衣の襞の

ように、スレスレに切れたり、ボロボロに崩れたりしているのも、この石だ、それを針線のように、偃松が幾箇処も縫っている。

急峻な登りを行く、雲は赤石山を包み隠して、西南にその連嶺の西河内岳の一角を現わした、さすがに富士山のみは、深くまつわる山を踏み踰えて、ひとり高く半天に立っている。

石の急壁を登りかけていると、雷鳥が一羽、ちょこちょこと前を歩いている、晃平が、狙いをつけて一発放したが、禽は横に逸れて、截られた羽が、動揺した空気に白く舞った、一行手取りにするつもりで、暫く追いかけて見たが、掌中の物にはならなかった。

疲労の足を引き擦って、石壁の上に登りついたとき、眼は先ず晶々 粲々 として、碧空に輝きわたる大雪田、海抜三千百八十九 米突 の高頂から放射して、細胞のような小粒の雪が、半ば結晶し、半ば融けて、大気を含んだ、透明の泡が、岩の影に紫色を翳しているのに、眩ゆくなるばかりに駭いた、南方八月の雪！　白峰をして白からしめた雪！　我ら一行の手は、初めてこの秘められたる、白い肌に触れたのである。

羚羊・長之助草（北岳の絶巓に登る記）

それから尾根伝いに、間の岳の絶頂まで這い上り、三等三角測量標の下に立った、北西に駒ヶ岳（甲斐）の白い頭が、眼前の鋭い三稜形をしている北岳に、挟みつけられて見える、霧が来て散った。

この附近は偃松（はいまつ）の原でなければ、暗礁のような岩角が立っていて、高山植物が点じている、なお北岳を見ていると、東の谷、西の谷、北の谷から霧が吹いて来て、その裾は深谷の方に布（し）きながら、頂上を匝（め）ぐって、渦を巻いている。西北の仙丈岳を前衛として、駒ヶ岳、鋸岳、木曾駒山脈の切れ間に谷が多いので、このように水蒸気も多く、そうしてこの山を目がけて、吹きつけるのであろう。

大雪田の石の峰を超えて、三角点の下に来た、木曾山脈を西に控えて、その間の高原を、天竜川が白く流れ、仙丈岳は渓谷を隔てて、その頂上の、噴火口と擬（まが）いそうな欠けたところが、大屋根の破風（はふ）のように聳（そび）えて、霧を吐く窓になっている。駒ヶ岳の白い頭は、白（しろく）崩（ずれ）山の名を空しくせずに、白く禿（は）げて光っている。

間の岳の峰から、北岳まで尾根が繋（つな）がっていることは、ここで初めて確かめられた、我が三角測量標の下には、窪地があって、そこには雪田が白く塊まっている、一丁ほども歩

いたかと思うと、また雪田がある、築土(ついじ)の塀の蔭に、消え残った春の雪のようだが、分量は遥かに多い。

石の壁は南方から連なって、人の歩く路を窄(せば)めている、もうこの辺からは、雪田が幾筋となく谷へと繋がっている、高頭君の説明するところによると、日本北アルプス中の白馬岳の雪とは、比べものにならないが、十月頃の白馬岳なら、この位なものであろうか、ということである、一体が暖かい南アルプスに、このように雪が多いのは、未だ山上では、春であるからであろう。

間の岳から北岳までは、北へ北へと、駿河甲斐の国境を、岩石の障壁が頽(なだ)れをうって、肩下りに走っている、その峰は皆剣のように尖れる岩石である、麻の草鞋(わらじ)が、ゴリゴリと、その切ッ先に触れて、一本一本麻の糸が引き截られるのが、眼に見るようで、静(しずか)に歩くさえ、砂でも噛み当てたように、ガリガリ音がする、あまり峻(けわ)しいから、迂回しようとして、足を踏み辷(す)べらすと、石の谿(たに)が若葉を敲(たた)く谷風でも起ったように、バサバサと鳴り出して、大きい石や小さい石が、ひた押しに流れて、谷底へと墜落するのもある、中途で石と石と抱き合って、停まってしまうのもある、その石の壁の頂には、偃松が多く、高山植物の中にも、ミヤマオダマキがうす紫の花を簇(むらが)して、岩角に立っているのが、色彩が鮮やかで、

こんな寒い雪や氷の、磽(こうかく)な土地も、深碧の空と対映して、熱帯的(トロピカル)に見えた。

峰伝いに下って、いよいよ北岳の直下まで来ると、雪田が二ツほどある、長さは二十町もあろう、その雪田の谷底に接触する尖端から、雪が融けて水になって、流れているのもある、この雪田は白馬岳のに、やや匹敵することが出来るが、厚味がそれほどないと、高頭氏は言った、それでもこんな大残雪があって見ると、日本北アルプスのみ、雪の自慢をさせて置けないと追加した。

ふと後から荷をしょって来た人足どもの、噪(さわ)ぐ声がする、東の峡間に、一頭の羚羊(かもしか)を見つけ出したのだ、なるほど一頭いるわいと気が注(つ)くころ、中村宗義は銃を抱えて、岩蔭を岩蔭をと身を平ッたく伝わって、谷側まで下りた、円く肥えた羚羊は、キョトンとした顔をして考えている、その短い角が碧空に動かずに、シーンと立っている、晃平の采配で、人夫一同は石を上から転がす、シッシッと叫ぶものがある、ホーイ、ホーイ、ホーイと怒(ど)鳴(な)る声がする、羚羊は石の転がり方を冷たく見て、一、二尺ずつ退(すさ)りながら、大石の側へ、寄って来る、そこには宗義が先刻から、銃を取り直して待っている、しかし火蓋の切りようが、狙った壺より少し早過ぎたために、羚羊はびっくりしながらも、驚くべき速力で、向うの山へと駈け上った、そうして偃松の傾斜の中へ入って、岩を楯にまたキョトンとし

て、こっちを見ている、角は木の枝のようで、体は岩のようにぴったりと静まる、宗義は銃を負って、岩から岩を殆んど四足の速さで、飛びながら追っかけたが、竟に遁がしてしまった、もっとも羚羊は跛足を引いていたから、たしかに銃丸が、足へ当ったろうとは後で言っていたが。

ここから仰いだ白峰の北岳は、峻急に聳えて、肩幅も、おもいの外広く、頂上は幾多のギザギザがありながら、大体において平ッたく切截したようになって、間の岳つづきの尾根から、抓み上げられたように、北方の天に捏ねられている、まるで麦酒の瓶を押し立てたようだと、高頭君は半ば恐怖を抱いて言った、その壮容は、殉教者や迷信者を作って、引き寄せるだけの価値があった、もう日は真ッ直ぐに照りつけるようになって、黄色の烈しい光線が、眼をチラチラさせる、未だ午前であったが、これからいよいよ北岳登りになるのだから、一行は高山植物の草原に足を投げ出して、塩のない、皮の固い結飯を喰い初めた、福神漬の菜に、茶代りの雪を噛んだが、喉がヒリつくので、米の味も何もなかった。それでも東に甲府平原と、それを隔てた富士山、西に伊那平を踏まえている木曾駒山脈、北の仙丈岳と駒ヶ岳、近くに北岳を仰いで、昼飯を済ました心持は、悪くはなかった。

雪田に沿いて、北岳に向う、先に尖った筋と見たものは、皆一丈もあろうという岩石の

重畳で、五つか六つ石が堆(うずた)かくなっているように見えたのは、岩石で組んだ立派な峰(ピーク)であった、その中でも、巨岩が垂直線に、鼻ッ先に立ちふさがっているところは、身を平ったく、岩と岩の間を潜ったり、這(は)ったりした、およそ間の岳から北岳の峰までの、石の草原には、深山薄雪草(みやまうすゆきそう)、深山金梅(みやまきんばい)、トウヤク竜胆(りんどう)、岩梅(いわうめ)、姫鍬形(ひめくわがた)、苔桃(こけもも)などが多いが、その中で、誰の目にもつくのは、長之助草である、この偃地(えんち)性の小灌木は、茎の粗い皮を、岩石に擦りつけるようにしている、槲(かしわ)に似て、小さい、鈍い、鋸の歯のように縁を刻んだ葉を、眼醒(めざ)めるように鮮やかな緑に色づけて、その裏面にはフランネルのような白い毛が、おもての緑と対照するために、密やかに布(し)いている、恰度(ちょうど)一枚の葉で、おもては深淵の空を映し、裏は万年雪を象(かたど)ったようである、卵形の白い花が八弁、一寸位の小さい花梗の頭に、同じく八個の萼(がく)を台にして、安住している、同じ日本アルプスでも、他所の長之助草に比べて、花でも葉でも、一と際小さい方であるが、それでも殆んど草原を埋めるばかりに群って、白山一華(はくさんいちげ)や、チングルマなどと交って、岩穴や山稜(リッジ)の破れ目に、咲いている、皺(しわ)のあるところに白い花がある、襞(ひだ)の折れたところに白い花がある、溝の穿(うが)たれたところに白い花がある、白い花が悉(ことごと)く長之助草だとは言わないが、白い花の中に、この花を見ないということはないほどである、大籠山の裏白金梅と、間の岳北岳間の長之

助草とは、我らの一行によって確められた、この高山植物の最大産地――今まで知られているところでは――であった。

倉橋君と私と一緒になって、石の峰を絶頂まで辿りついたころは、正午を少しばかり過ぎた、高頭君以下も、やがてつづいて来た、絶頂は大別すると、三つに岐(わか)れていて、偃松が少しばかり生えている、初めのは四角張った石を畳み上げてある、中には三角測量標が立っている、高く抜き出る北岳の頂から、更に自分だけ高く抜いたこの三角点は、日本南アルプスの中で、縋(すが)り得べき土地の垂直的突端である、それから上は絶対無限の空ばかりだ、三角標の基脚には黄花石楠花(きばなしゃくなげ)、チングルマ、アオノツガサクラ、浦島ツツジ、四葉シオガマ、白山一華、偃松などが西の障壁へと、斜めに飛び飛びに漂っている。

小さい石祠がある、屋根には南無妙法蓮華経四千部と読まれた、大日如来(だいにちにょらい)と書いた木札が建ててある、私たちの一行より、二十日も前に登山した土地測量技師や、昨年登山した東京の人たち、山麓蘆安(あしやす)村でよく聞く名の森本某、名取某の名刺が散らばっている。

外にも壊れかかった石祠がある、中には神体代りの小鉄板が、鏽(さ)びて腐蝕しながらも、奉納白根大日如来寛政七年乙卯六月と読まれた、白峰赤石両山脈の頂で、山の荒神たちと離れられない関係があるらしい、鉄の槍身が、赤錆(さ)びになって仆(たお)れていた。

山頂の眺めは、こうしている間にも、絶えず変っている、仙丈岳の頂上は、雲に包まれてしまった、赤石山脈は間の岳だけを残して、千枚沢岳と悪沢岳とが、消え失せた、脚の下は天竜川だけが認められて、木曾山脈は、紺の法衣(ほうえ)を着た坊主が行列しながら、帳(とばり)の中へ一人ずつ包まれるように、見えなくなった、大樺(おおかんば)谷の左には、大樺池が森林の底に小さく、穴のように見える、末の梢と頭の枝とが、緑に濃淡の調子をつけて、森然として沈黙している。

測量標の直ぐ下は、野宿に適当な広い平地があって、それから凄(すさ)まじいほど、垂直の断崖を作(な)している、その下が雪田で、雪解の水は大樺の谷、それから小樺の谷へと、落ちているらしいが、そこまでは解らない。

ともかく北岳というところは、北は駒ヶ岳、北西は仙丈岳、西は木曾山脈、南が間の岳、農鳥、北東が地蔵岳鳳凰山などと、高度我に下りながらも、ほぼ等しい大山岳圏に囲繞(いじょう)せられているから、北アルプスの高山で見るような、広々とした眺望は獲(え)られない。

この白峰山脈縦断旅行も、これでおしまいになるのかと思うと、嬉しいような、気抜けがしたような、勝利の悲哀といったような、情(なさけ)ない心持が身に沁み泌みと味われて来る。

信濃金梅・木賊（大樺谷に下る記）

北岳三峰中の最北端まで来ると、石で囲った木の祠（ほこら）があって、甲斐が根神社と読まれた、そこから何百米（メートル）突か低くなって、尾根の最北端に駱駝（らくだ）の瘤（こぶ）のような峰が、三個ほどある、これを私は仮に、三峰岳と名をつけた、この岳から谷が切れて、北に仙丈岳が聳えている、尾根伝いに北の方、甲斐駒を隔てて八ヶ岳と、その天鵞絨（ビロード）のような大裾野を見た、下りがけに小さな雪田が、二ツばかりあった、人々は雪を爪でガリガリ掻きながら、うまがって喰べた、ツガサクラや、黄花石楠花の間を伝わって、三峰岳の方に向いながら、途中から偃松（はいまつ）を横切って、大樺谷へと下りた、偃松が尽きると、春の低原地に見られるような、生々しい緑の草葉が、陰湿の土を包んで、その傾斜が森林の中まで落ちている、草ばかりではない、小さい切石や、角石が隠れていて、踵（かかと）でも足の指でも噛まれて、傷だらけになる、信濃金梅（しなのきんばい）の花は、黄色な珠を駢（なら）べて、絶頂から裾までを埋めた急斜の、大黄原を作っている、稀に女宝千鳥や、黒百合も交っているが、このくらい信濃金梅の盛（さかん）に団簇（だんそう）したところは、外の高山では、見たことがない。

白樺の痩せた稚い樹が出て来て、その中から山桜の花が、雪のように咲いている、四月

の色は北岳の北の尾根から、信濃金梅の傾斜を伝わって、この森林にまで、流れ込んでいる。

次第に喬木の森林に入った、白く光る朽木は、悪草の臭いや、饐(す)えたような地衣の匂いの中に立ち腐れになっている、うっかり手が触れると、海鼠(なまこ)の肌のような滑らかで、悚然(ぞっ)とさせる、毒蚋(どくぶと)が、人々の肩から上を、空気のように離れずにめぐっている、誰も螫(さ)れない人はない、大樺池(おおかんばいけ)を直ぐ眼の下に見て、ひた下(お)りに下る。

森がちょっと途切れて、また草原になる、雪の塊が方々に消え残っている、大樺池は、この緑の草原の中で、針葉樹や白樺の稚樹(わかぎ)に、三方を囲まれ、一方は原に向いている、水はうす汚なくて、飲もうという望みは引ッ込んだが、草影、樹影、花影が池に入って、長い濃い睫毛(まつげ)が、黒い眼の縁(ふち)に蓋をしている、緑晶のような液体の上を、水虫が這っている、それが原の中の「眼」から、転ぶように動く涙のようだ。鳳凰山地蔵岳の大花崗岩山は、その峻(けわ)しい荒くれた膚を、深谷の空気に、うす紫に染めている。

それからまた針葉樹林を駈け下りる、水の音がするすると、樹の間を分けて上って来るようだ、水！　水！　連日味わなかった水！　一同は狂気のように躍り上って、悦んだ、そうして小さい谷川へ下りたときには、敷石の水成岩の上に、腹這いになって、飲む、嗽(すす)

ぐ、洗う、もう浸かるばかりにして、やっと満腹した。

それから大樺谷を右左に、石伝いに徒渉すると、窮渓が開けて、林道となった、材木の新しく伐り倒された痕を見つけて、もう人がいると思った、羊歯や木賊の多く生えている谷沿いの、湿地を下りてから、路も立派についている、能呂川の縁の、広河原というところへ出た、『甲斐国志』能呂川の条に「河側に木賊多し、残篇風土記に、巨摩郡西隈本木賊とあり、意ふにこの川の古名なるべし」、今も木賊が、この辺到るところに自生している。

材木小舎があって、男女七、八人、精々と労作をしている、木は唐檜が多く、飯櫃の材料に、挽き板に製している、晃平を使いに立てて、一泊を頼んで見たが、聞き入れない、一行は急流に架けた木橋を渡って、能呂川の対岸に出ると、北岳が頭を圧すように、近く空を劃って、頭抜けている、「あの山の頂を踏んだ」という誇が、人々の顔にまざまざと読まれた。

十町ばかりも足をひきずって歩いたが、ここに川縁の広い沙原――下樺という――を見つけて、今夜の野営を張ることにした、床は栂の葉で布き敷めた、屋根は例の油紙である、疲れた足を投げ出して、荷の整理にかかる、今日は殊に岩石の多い傾斜地を来たの

で、今までは一日一双か二双位の草鞋(わらじ)が、平均五双ずつを費やした、最も堅固なものにしていた麻の草鞋も、大穴が明いて、棄てるより外はなかった、繃帯(ほうたい)、絆創膏(ばんそうこう)、衣服の修繕の糸や針、そういうものが、人々の手から手に取り交わされた、谷川の清い水で、鍋や茶碗が充分に洗われた、この日の夕餉(ゆうげ)はうまかった。

夜になって空に星はあったが、電光が白い柱を、谷の中に投げては、夜営の人々をおどろかした、夜半には、秋雨が音なく注いだ、川縁に転がっている流材を焚火にして、寒さを凌(しの)いだ、針葉樹の切崖で囲んだ、瓶のように窄(せま)い谷底からは、天も谷川ほどの細さで流れている。

青空文庫情報

底本：「山岳紀行文集　日本アルプス」岩波文庫、岩波書店
　　1992（平成4）年7月16日第1刷発行
　　1994（平成6）年5月16日第5刷発行
底本の親本：「小島烏水全集」大修館書店
　　1979（昭和54）年9月～1987（昭和62）年9月
入力：大野晋
校正：伊藤時也
2009年8月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白峰山脈縦断記

小島烏水

２０２０年　７月１７日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/